

# 浦賀文化

令和 3 年 (2021 年) 1 月 1 日

第 64 号

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

## 山本 コマツ —海軍料亭「小松」の創業者—

料亭「小松」は、大日本帝国海軍の多くの軍人に愛好され、戦後も在日米海軍・海上自衛隊関係者に広く利用されたことから、海軍料亭と呼ばれた。



東大震災後、海岸の埋め立てに伴い、米が浜に移転しました。

◇ ◇ ◇  
「旧海軍士官で小松を知らない者はいない。彼らは小松を『松』の字にちなんで『パイン』と呼び親しみ、小松に入りに行くことを誇りとさえ思った。艦隊が入れば真っ先に小松に行き、飲み、唄い、かつ騒いだ。旧海軍華やかなりし頃の、海軍士官たちの喜びと涙が『小松』には刻まれている」外山三郎はその著「錨とパイン」でこう書いている。(海軍料亭小松物語より)

横須賀市の中心部の一角をなす米が浜に一種独特な湾曲した囲い塀をもつ料亭「小松」。残念ながら平成二八年(二〇一六年)五月の火災により全焼したことが惜しまれます。今回は、料亭「小松」の思い出に触れながら、創業者である山本コマツについてご紹介いたします。

料亭「小松」は、横須賀鎮守府が開庁された翌年の明治十八年(一八八五年)に開業し、百三十年余りの歴史を持つ老舗の料亭として知られていました。創業当時は、田戸の海岸沿いにありましたが、大正十二年の関

ら旧海軍関係者の足跡を物語る書や軸物も多く、往時の彼らを偲ばせるには格好の料亭でした。

◇ ◇ ◇  
料亭「小松」を創業した山本コマツは、ペリー提督が浦賀沖に現われた嘉永六年(一八五三年)の四年前、江戸の小石川に生まれました。本名は「悦」といいます。悦が十代の中頃、父が大病に見舞われ、商売が傾いてしまします。そこで悦は家計を助けるため、近所で親しくしていた医師の娘「お梅さん」について浦賀にやってきました。それは悦が十七歳の時のことでした。当時の浦賀は、奉行所とその出先として船番所が置かれ、出船入船で繁栄を誇っていました。

悦は、お梅さんと一緒に廻船問屋「松崎屋」に住み込み、掃除などの雑用をして過ごすかわら芸ごとの稽古に励んでいました。船頭相手の仕事には向かないと言われ、わずか二ヶ月ほどで江戸に返されることになりました。そして、西浦賀の海岸沿いにあったという浦賀随一の旅館料理屋である「吉川屋」で送別会を開いてもらいました。そのとき、吉川屋の女将に促されて常磐津節を聞かせたところ、その出来栄に感心した女将にすつかり気に入られ、吉川屋でのお座敷生活が始まりました。こうして吉川屋での女将との運

命的な出会いが、その後の料亭「小松」につながって行くのでした。

「小松」という名は、吉川屋での修行時代の明治八年(一八七五年)の秋ごろに浦賀沖で行われた水雷発射実験の模様を視察に来た小松宮から頂いたものといわれています。

明治十七年(一八八四年)、鎮守府が設置され、やがて横須賀は東洋一の軍港に発展します。横須賀鎮守府の開庁に歩みを合わせるかのように米が浜に料亭を移転した「小松」は、まさにこの海軍とともにありました。

大正十三年(一九二四年)には、コマツの喜寿の謝恩祝賀会が一週間にわたり盛大に催されました。そして、コマツの甥・呉東忠助の長女・山本直枝が二代目女将として経営に携わるようになったのもこの年のことでした。

コマツは、昭和十八年(一九四三年)四月、九十六歳の天寿を全うしました。初代女将として才覚を発揮した山本コマツの記憶は、浦賀郷土史の一ページとして永く語り継がれていくことでしよう。

(芳賀久雄)

### ★参考資料

- 海軍料亭小松物語 浅田 勁著
- 続・横須賀人物往来 かなしん出版
- (公財)横須賀市生涯学習財団



# 歴史 語りい座 浦賀奉行所編 その十四

郷土史家 山本 詔一



## ● 支配組頭の着任 ●

嘉永三年（一八五〇年）三月、幕府は浦賀奉行所に支配組頭を置くことを決めた。早速、甲府勤番であった辻茂右衛門と小普請組の尾藤高蔵の二人が任命され、御役料二〇〇俵と御役金一〇〇両が支給される待遇で迎えらるることとなった。ところが、二人が浦賀へ着任したのは、この年の十二月になってからであった。着任までになぜ九か月も要したのか、残された史料にはなにも記されていない。推察するに、支配組頭着任にあたり、奉行所の南側（現在の寿光院への入り口周辺）に役宅が新築されている。この完成に合わせて着任が遅れたということであろうか。というのも、この年の五月に勘定奉行の石河政平や老中・阿部正弘のブレインであった筒井政憲らが、近海防御の見分と浦賀の御備場視察に訪れている。その時、在地奉行の浅野を支援するため、在府の奉行・戸田と共に辻が浦賀奉行所支配組頭として浦賀に駆けつけている。浦賀に着した戸田奉行は、感応院（現・西叶神社）を本陣として宿泊しているのに対し、辻が宿泊したのは、奉行所長屋と記されている。このことから、支配組頭の役宅はまだ完成していないことが分かる。

また、この見分に支配組頭として辻だけが浦賀を訪れている。奉行二人が浦賀で出迎えて接待をしているのに、なぜその時、尾藤は行動を共にしなかったのであろうか。

十一月末、時を同じく与力二名、同心五名が増員となり浦賀に着任した。彼らの荷物と共に支配組頭二人の荷物も船で運ばれてきた。与力・同心たちの荷物については、事前の連絡で、西の大黒屋や川津屋の蔵で一時的預かることになっており、到着と同時に運ばれた。一方、支配組頭の荷物は、下田問屋の管理下にある船で着いたのだが、どこで預かるのか聞いていないということになった。蔵を持たない下田問屋は、宛先が郷宿の倉田屋と伊勢屋になっているので、そこへ届けるように指示した。しかし、これを聞いた両名は、預かることは承知したが、荷物の出し入れは、下田問屋から東西の村役人に頼んでほしいと言う。下田問屋の行事役は、東西の村役人の所へ行くが、良い返事が返ってこない。協力的でない村の人々の態度に業を煮やした下田問屋は、「わかりました、お役所（奉行所）へ出向き、事情を話してお役所から手助けをしてもらいましょう」と言う。と、渋々折れて、人を出してくれることになった。

その後、両支配組頭が江戸を出立したと連絡が来た。彼らの着任を快

く思っていなかった東西浦賀の村は、このお迎えも手軽に済ませようとしていた。しかし、浅野奉行より、与力・同心組に対し「（支配組頭の）お迎えは、奉行の初お目見え同様にすること」との指示があり、同心衆が平作村まで迎えに出ると知ると、東西の村でも年寄役と廻船問屋の年寄も平作まで迎えに出向き、両名主は大津村で迎えることにした。

十二月十一日、支配組頭は正式に着任となり、十五か条におよぶ役務が示され、副奉行格であることが認識された。それは、与力・同心だけでなく、東西浦賀の村役人にとっても有難くない役職の存在であった。ペリー来航後に辻支配組頭が幕府へ提出した上申書には、「奉行所の役人と浦賀の商人との癒着が甚だしく、これをなくすには奉行所の移転より方法がない」と記されていた。

## 俳句の散歩道

秋しぐれ藪に眠れる臺場跡  
大塚 遊球子

鬼柚子のジャムを作りてあ、美味かな  
中川 ミツ

## 笑話一題

ふだん郷土資料館に来館される方は、歴史好きな大人や浦賀散策をする年配のウォーキンググループがほとんどです。ところが先日、近隣の小学生たちがたくさん見学に訪れてくれました。新型コロナウイルスの影響により、実施できなくなってしまう修学旅行の代わりに、地元の方々が企画してくれた「浦賀・鴨居6年生思い出プロジェクト」です。

本来ならば日光への宿泊旅行だったのを思うと、切ない気持ちでいっぱいでした。そんな小学生達に対して同じ気持ちを持つ、ボランティアさんや近隣の方々が一つになり、コロナ禍での楽しい思い出づくりのために、大勢の大人達が奔走していました。

このコロナの影響で、人との距離はとらなくてはいけません。思いやりの気持ちの距離は離れずにあるのだなど、とても温かな気持ちになりました。

(K\*U)



浦賀コミセン分館講座

## 浦賀道をゆく

浦賀奉行所開設300周年を記念して、浦賀道について学び、追浜～県立大学まで3回に分けて歩きます。

- 〈日 時〉2/25、3/4.11.18 毎回木曜日 13:30(歩き13:00)～15:30
- 〈場 所〉浦賀コミュニティセンター分館他
- 〈定 員〉抽選25名(健脚向き)
- 〈講 師〉仲野正美氏
- 〈参加費〉150円(傷害保険代)
- 〈持ち物〉飲み物、筆記用具など
- 〈締 切〉2月5日(金)必着

※ 詳細は、チラシや広報よこすか1月号をご覧ください。

